スイス・オーストリア・グルジア調査記

北海道大学 GCOE「境界研究の拠点形成：スラブ・ユーラシアと世界」の支援により、2010 年 1 月から 3 月にかけて、二度の海外調査を行った。コーカサス出身エリートの境界を越えた広範な活動を追うため、今回はグルジアだけではなくスイスとオーストリアにも滞在して、情報収集に努めた。ユーラシアの境界地域に注目する本 GCOE プロジェクト研究の成果の一端としてここに簡単に報告をまとめる。また、報告者の本務校（当時）である大阪大学世界言語研究センターで進めている「民族紛争の背景に関する地政学的研究」プロジェクトにおいて構築した研究協力者とのネットワークも有効に機能した点も特筆できる。

スイス訪問

スイスとコーカサス。永世中立の旗を掲げて国連機関などの誘致と顧客の秘密管理による銀行・生保業界の成功ならびに積極的な観光産業育成により、高い生活水準を達成し、世界最高の物価と高等研究機関の研究設備の充実ぶりまでも誇るスイス。他方、ソ連崩壊後、重なる社会不安と貧困にあえぎ、地域紛争の解決どころか、2008 年にはロシアによる軍事侵攻を招くなど、未だに戦火も絶えないコーカサス。現在、対極的な状況にある両者は全く接点がないように一見思える。しかし、19 世紀にはヨーロッパ人登山家が訪れる貧しい秘境であった点で両者は共通する。実際、スイスはコーカサス諸国が目標としてよく引き合いに出す国でもある。

こうした地政学的共通点をもう少し挙げてみよう。駐グルジアスイス大使をつとめたアムベルグによれば、水以外の資源はないが観光資源には富む、大国に囲まれた小さな多民族国家、歴史的には屈強な傭兵という人的輸出資源で知られた貧しい山岳国として歴史的経験が共通する（http://www.geotimes.ge/index.php?m=home&newsid=5939参照）。実際、スイスが誇る国際機関都市ジュネーブは、お世辞にも伝統に裏付けられた観光資源に大いに富むとは言い難いし、首都のベルンは逆に伝統的中世都市そのものである。チューリッヒも魅力的な都市だが、ドイツの地方都市と大きく変わらない印象がある。文化資源そのものでいえば、東西文明の十字路であるコーカサスの方がコンテンツはより魅力的にさえ思える。

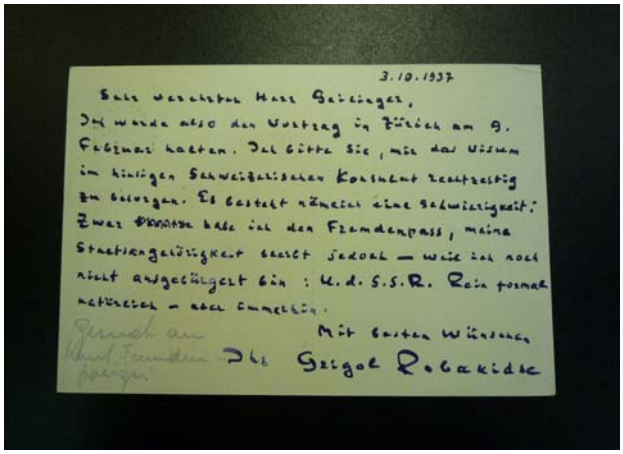
しかし、百聞は一見にしかず。今回の滞在では、歴史と地政学的環境の重要性をより認識することになった。改めて繰り返すこともないが、スイスの歴史はいわゆる国民国家秩序の確立と表裏一体である。武装永世中立は、まさに近代的な国際秩序の出発点とされる 30 年戦争における中立に端を発し、フランス革命によるヨーロッパ秩序の大変動を収束させるべき開かれた 1815 年のウィーン会議で公認のものになった。国連に加盟したのはごく最近で、シェンゲンによりヨーロッパの国とパスポートなしに自由に行き来できるように

なったのは昨年のことに過ぎないという。通貨は現在もユーロに統合されていない。めまぐるしく移り変わる国際秩序の中で、代償も厭わず、生き残ってきた国としてのしたたかさこそ、未だに国家整備の途上にあり、「欧米スタンダード」を単純に受け入れがちなコーカサス三国が学ぶべきところかもしれない。

もちろん、こうした総合的な比較を得るために現地に飛んだわけではなく、ベルン大学で客員研究員を務めるラップ博士（前ジョージア州立大学准教授）と今後の共通の研究計画などについて詳しく話をできることはまたとない機会であったし、氏を通してこれまで未見であった様々な資料を入手することができた。また、ベルン大学をはじめスイスの教育機関では（日本ではなかなか手に入れることができない）グルジア・アルメニア学に関する様々な資料が充実しており、直接大学図書館等で閲覧できることは大きな収穫であった。ジュネーブでは、高名なジャーナリスト・研究者であるチェテリアン博士のオフィスを訪れ、グルジア紛争以降のコーカサス情勢について意見交換を行い、様々な示唆を得た。レバノン出身でカラバフ紛争にもアブハジア紛争にも直接従軍取材した経験を持つアルメニア系のチェテリアン氏は、近年執筆活動を本格化させ、多くの論文・図書を世に問うている。トルコ・アルメニア関係の正常化についても、バランスのとれた意見を聞くことができた。また、チューリッヒではグルジアとの関係史に詳しい人物や現地在住のグルジア人に次に触れる資料参照などに当たって便宜を図っていただいた。

今回のスイス滞在では、上記のような研究交流の他、近年注目を集めるグルジア一次独立喪失後の亡命知識人に関する知見を増やすことができたことも大きな成果であったと考える。たとえば、グルジアにおける 20 世紀詩人運動の指導者であったグリゴル・ロバキゼ関連の資料を文書館で入手することができた。ロバキゼは戦後ドイツからスイスに亡命するが、ナチスとの関係を疑われて、晩年は不遇を託った。もっとも、近年ロバキゼが記したムッソリーニ伝などがドイツ語からグルジア語に翻訳されて出版されるなど、一つの脱ソ連社会の試みとしてグルジアにおいて彼の著作活動は注目を集めている。同様に高名な言語学者かつ代表的な亡命知識人でチューリッヒ大学講師も務めたキタ・チュヘンケリに関する情報もえた。ちなみに彼の兄でグルジア亡命政府の要人であったアカキ・チュヘンケリは、日本軍による反ロシア工作との関連があったことが最近明らかになりつつある。在外グルジア人のネットワークについては、今後さらに研究が進むことが予見される。

なお、余談ながら、このほか、様々な局面で現地ならではの情報の接することが多かった。ネスレなどスイスの食品会社は、グルジアの飲料水メーカーであるナベグラヴィなどへの投資を行っており、また、医薬品の分野でもロシュやノバルティスなどが展開しているという。また、近年フランス領からジュネーブへの強盗を繰り返していたグルジア人グループが摘発されるなどして、スイスでのグルジア人の評判は地に落ちている。バラ革命によって居場所がなくなったグルジア人がヨーロッパを荒らしているとのことで、こうした情報を、現地ならではの切実感をもって認識することができた。


3.10.1937

Sehr verehrter Herr Geiringer,

Ich werde also den Vortrag in Zürich am 9. Februar halten. Bei Gelegenheit, mir das Visum im hiesigen Schweizerischen Konsulat rechtzeitig zu besorgen. Es besteht nämlich eine Schwierigkeit: Zwar [illegible] habe ich den Fremdenpass, meine Staatsangehörigkeit besteht jedoch — wie ich noch nicht aufgeklärt bin: U.d.S.S.R. Rein formal natürlich — aber immerhin.

Mit besten Wünschen

Ihr Sergol Robakidse

Persönlich an Herrn Freundlich [illegible]

ロバキゼの手紙

オーストリア

かつてグルジア留学時代にウィーンを拠点にヨーロッパを回っていたので、ウィーンの街自体は懐かしかったが、一週間のみとはいえ本格的な研究滞在は初めてであり、その成果については予見できない点も少なくなかった。しかし、短期間の間に貴重な情報と資料を入手することができた。旧知のジョルジオ・ロータ博士が研究員を務めるオーストリア科学アカデミーイラン学研究所に様々な便宜を提供いただいた点について、深く感謝したい。

発見は予期せぬところからというが、近年報告者が追っているトビリシ出身のアルメニア人家系について、イラン・オーストリア史が専門のゲヒター女史に尋ねたところ、一族出身者の子孫がウィーンに在住との情報を得た。詳しくは他稿に譲りたいが、これまでなかなか明らかにできなかったイラン在住の一族の系図について新たな情報を得るとともに、20 世紀にも興味深い人物を輩出していたことを知り、改めて家系研究の奥深さとコーカサス出身者の広範囲な活動に驚愕した。

伝統的にイスラーム学やトルコ研究のさかんなドイツ語圏にあって、独立したイラン学研究機関としてウィーンの研究所はヨーロッパ唯一とのことである。ちなみに、併設されているアジア宗教学研究所には、日本からインド学の若手研究者が複数留学しているとのことで、ヨーロッパにおけるアジア学の奥深さを改めて痛感した。また、研究所のすぐ近くの市内中心部には今も赤軍兵士の巨大なモニュメントが設置されている。オーストリアが 10 年の占領を経て独立する際に、モニュメントの保全については条文中に明記されたとのことで、エストニアやグルジアでの撤去騒ぎを報告者に想起させた。なお、訪問を希望していたメヒタル修道院は、来年開院 200 年を迎えるということで改装中であり、図書館は利用できなかったが、イラン学研究所を通じて、そのコレクションの概要などについて

一定の情報をえることができた。ロータ博士に加えて、シュヴァルツ所長にも深く感謝したい。

左)ウィーンの赤軍兵士モニュメント　　右)ウィーンのイラン人家庭

グルジア

グルジアは昨年の秋にも訪れたが、最近はシンポジウムや研究会に併せて訪れることが多く、まともに 2 週間もの調査期間を得たのは、スラブ研究センターに奉職する以前のことだったかもしれない。今回はかつて所属した東洋学研究所の他、写本センターと国立文書館での作業に集中し、効率よく研究実施と資料収集につとめるようにつとめた。

東洋学研究所では、副所長を退いたかつての指導教官グリゴル・ベラゼ博士に久しぶりに指導を請うことができた。また、滞在最後の晩には、東洋学研究所で報告者も寄稿した*La Géorgie entre Perse et Europe*(Paris: L'Harmattan, 2009)出版記念の会が催された。留学後の 10 年間でこの世を去った先輩研究者も少なくないが、グルジア史のロルトキパニゼ博士、オスマン史のスヴァニゼ博士、イラン系言語学のチュヘイゼ博士、イラン学のギウナシュヴィリ博士など 80 歳を優に超える高名な研究者の謦咳に久しぶりに接し、貴重な時間を過ごすことができた。そのほか、写本センターでは、サファヴィー朝期の文書資料を確認し、国立文書館ではペルシア語文書の他、前述のアルメニア人家系に関する帝政ロシア期の史料なども目を通すことができた。

ロシアの影

さて、研究資料の収集の他、現地滞在ではグルジアにおける現況の把握についてつとめた。5 月に予定されている地方選挙に向けて、政治の季節を迎えつつあるグルジアであるが、今のところ市民の関心は低く、今ひとつ盛り上がっていない。その理由の一つは野党勢力が相変わらずの野合ぶりを見せつけているからであるが、そんな中、放送でも、あるいは会話の中でも、どこでも話題に上るのはロシアとの関係についてである。

ロシアの「存在感」は、グルジアでも急速に*強まっている*といえよう。存在感に括弧をつけ、強まっているを斜線にしたのは、その評価が非常に難しいからである。ニュースのレベルでは、報告者がグルジアに滞在中に、ブルジャナゼ前国会議長がロシアを訪問し、プーチン首相と会談を行った。もちろん、これは現地でも大きく報道された。昨年秋から、ノガイデリ元首相が毎月のようにロシアを訪れ、プーチン首相やメドヴェージェフ大統領とも会談し、ロシアの政権与党と自らの政党の協力関係を約束する協定も結んだ。ブルジャナゼもこの動きに触発された形である。

グルジア政府も、ロシアを全く無視することの難しさを認識し始めている。3 月には約 3 年半ぶりにロシアとの陸上国境が開かれた。アルメニアの圧力もあったといわれるが、与党政府にとっても、野党がロシアカードを強烈にアピールする中で、ロシアとの国交断絶状態を継続することのデメリットは認めざるをえないのであろう。ただし、安全保障の観点から慎重な意見も未だ聞かれる。また、報告者がグルジアに到着した日には、折しもブコーフスキーやイラリオノフといったロシアの現体制に批判的な知識人がグルジアを訪れている。また、年初からチェチェン共和国の故ドゥダエフ大統領の未亡人も迎えたテレビ番組などを放映するロシア語放送局を設立するなど、グルジア現政権は、ロシアを意識した政策にこれまで以上に力を入れている。サアカシュヴィリ大統領は一方的な親欧米策だけではなく、旧ソ連空間の一部として、その中で「圧倒的に民主的・自由主義に成功した」グルジアのプラスイメージ強調をこれまで以上に意識していると思われる。ただし、知人が漏らした「グルジアの敵プーチンを倒して、民主的なロシアを作るためにグルジアも協力しようというけれど、民主的なロシアが一番怖い」という一言も報告者には印象的である。ロシアに対する警戒感といっこうに進まない国造りのジレンマに陥っているように見える。

グルジアは、戦争後、国家の舵取りの主軸が見えにくくなっており、昨年夏にも新たに戦争が起こると多くの市民が信じていたと聞く。アメリカのバイデン副大統領がグルジアを訪問して戦争を阻止してくれたなどという声を知人から聞くと、やはり未だ国作りの途上にあるグルジアの脆弱性を感じざるをえない。いわゆるグルジア紛争後、多くの市民はグルジアが今もロシアの影から逃れられないことを自覚しつつあり、独立がいかに準備のできていない状況下で突然起こったのかを口にする知人もいる。これは、裏を返せば、グルジア独立の明日をも知れない姿に対する懸念の表明でもある。一方で、ソ連時代を知ら

ない若者はロシアに対して非常に厳しい姿勢を持つというが、その内実は今後関心を寄せるに値しよう。なお、上記の点も含めて、グルジアの現況については、日本ビジネスプレス(http://jbpress.ismedia.jp/)に連載中の報告者によるインターネットコラムも参照いただきたい。

モータウン・ミュージックと断水

少しずつ春に向かっていたグルジアでの 2 週間は、瞬く間に過ぎていったが、それでも久しぶりに乗り合いバスで様々に街を動き回ることもできた。あるとき、後ろの席から、マーヴィン・ゲイとタミー・テレルの Ain't No Mountain High Enough のメロディーが流れてきた。モータウン全盛期の限りなく格調高い名曲の、もっとも美しいさびの部分を着メロとしてさりげなく使っているのは、別にとりたてて目立つところもない、普通の若い女性である。このあたりのセンスが、あまりにも洒脱で、報告者をしてこの国を離れ難くさせている。しかし、というべきか、やはりというべきか、ソ連の中にあったとは思えないこの地上のユートピアでの最後の夜には、水道管破裂による広範囲での街の断水が発生し、その後丸 1 日以上の帰国行を前にして、シャワーを浴びることもできなかったのは、これまた変わらぬグルジアの現実であった。

以上、二回にわたる海外調査で訪れた各国について寸描を加えた。実際に収集することができた資料等については、今後詳細な解析を加える必要があるが、北海道大学スラブ研究センターGCOE プロジェクト関係各位ならびに大阪大学世界言語研究センター地政学プロジェクトの同僚各位には貴重な機会の提供と出張への理解に対して改めて厚く御礼申し上げる。

(前田弘毅、首都大学東京都市教養学部准教授)